平成26年9月26日

保護者の皆様

平成26年度「全国学力・学習状況調査」の結果について

千早赤阪村立千早小吹台小学校
校　長　　山　下　桂　滋

今年の4月22日に実施しました標記の調査（6年生対象）の結果から見えてきた本校6年生の実態と今後の課題と改善点について、学校として行った分析と考察をお知らせします。

算数科の調査より

A 調査（主として知識）について

平均正答率が全国平均を下回っています。特に、四則混合計算の理解と処理や、比例などの数量関係についての設問で、正答率が低い傾向があります。きまりを理解して筋道立てて考えたり、複数のことを比較しながら考えたりする論理的な思考力の育成が課題であると考えています。

ただ、1（5）の「100－20×4」の計算問題についての正答率は低いのに対して、8の「答えが100－20×4の式で求められる問題を、下の1から4までの中から1つ選んで、その番号を書きましょう。」という全く同じ式をもとにした文章問題では、正答率が1．5倍に上昇しています。式の意味を考える形になると、1（5）で間違えた児童のほとんどが、8では正解していました。また、1（3）の「9－0．8」の正答率が低く、誤答者は全て0．1と解答しています。これは、位取りをした筆算のイメージではなく、横式を見たまま、あるいは頭の中のイメージのまま、位取りに関係なく、9－8＝1という処理に意識が働いてしまっている可能性があります。この2点から考察すると、途中の思考や処理を、丁寧に行い、よく確かめることでミスを防げる部分が大きいように感じられます。結果が伴っていないのは、児童質問紙での問いの中で、算数学習に対して、興味関心を持って取り組もうとする意欲が弱いことにも大きな課題があると考えています。

B 調査（主として活用）について

平均正答率は全国平均を下回っています。ただ、全国平均を上回ったのは、畳の敷き方のきまりを基に、長方形の敷き詰めを行う設問でした。これ以外にも、全国平均を下回っているものの僅差であった設問は、40人分のごはんを決まった人数で分けるときに図示する問題や正しいグラフの選択、身長に見合った使いやすい箸の選択に関する問題でした。これらの問題で共通することは、考えるべきことが、問題に添えられている絵や図などの視覚支援資料によって明確になっているということです。逆に、問題の中に絵や図があるものの、スケジュールの時間調整に関する問題や重なるリズムの規則性を考える問題などは、より高い文章読解力が必要となり、視覚的な理解が得にくいという要素があるため、正答率が低いという結果になっているのだと考えています。

視覚的な理解に頼らず文章題を解くためには、文章読解力と共に、時間や空間を認知する力も必要になります。また、考える場面での設定・条件が複合的なものについては、「まずは～、そして～」のように順序立てたり、「～ということは、つまり～」のように、自分の言葉で置き換えたりして整理することなども必要となります。

今後は、算数科の学習はもちろん、普段の学校生活の場でも、毎時間の学習課題の徹底や反復学習を集中して行うと共に、論理的思考を育成するため、意欲を持って、算数的な活動に取り組めるように、生活感のある体験的な活動に取り組む必要もあると考えています。

国語科の調査より

A 調査（主として知識）について

平均正答率は、全国平均を少し下回っています。漢字学習に関する問題では、6設問中、4設問で全国平均を上回っていますが、文法・語彙に関する問題は、若干下回っています。正答率が低かった問題は、「物語の一部に入る適切な人物の名前を書く」という、会話文から登場人物の相互関係を捉えるものや、物語から読み取ったことについて会話している内容について理解するものなど、「読解力」を問われるものでした。漢字の読み書きが苦手である、ことわざ・慣用句についての知識が少ない、語彙の獲得や語句の意味理解が不足しているといった課題から、誤答が多くなっている児童が見受けられます。

B 調査（活用力）について

平均正答率は全国の平均正答率を下回っています。設問別では、10設問の内、全国平均を上回ったのは、2設問でした。内容を関係付けて捉えたり、まとめて書いたりする設問、登場人物それぞれの着眼点の違いを捉える設問で、正答率が大きく下がっていました。また、目次や索引を活用して本を効果的に読むことが問われる設問も、低い正答率でした。辞典・辞書を日常的に使うような経験の有無も影響しているように思います。

B調査の課題を総じて挙げると、文章や資料から分かることを総合的に捉える読解力に課題があると言えます。逆に力があり、発揮できていたのは、「話す・聞く」の活用力の部分で、これに関する設問では、全国平均を大きく上回っていました。今年の6年生は、学校行事で運営・進行する活動に意欲的で、臨機応変に対応できる児童が多くいます。ただ、音声言語での対応は得意でも、少し複雑な文章の読解については、苦手な児童が多く、様々な課題を持つ児童がいることが伺えます。このような実態から、特に、B調査について集中して効率よく取り組むことが難しく、前半の問題に時間を取られたケースもあると推察しています。児童質問紙の結果にもあるように、国語B調査の時間が足りなかったと感じている児童の割合が、本校ではかなり高い傾向が見られました。また、B調査は、判断して書く力も問われます。書くことで、物事や自分の思考の内容といったものを整理する力を身につけ、結果として、その方法の良さを体感し、実際の生活に役立てるような活用力を育てていくことが、長期的な課題であると考えています。

今後は、集中的な漢字練習や音読指導と共に、文章の読解力の育成に向けた取り組みを更に、進める必要があると考えています。

学習状況アンケート調査より

児童質問紙によるアンケート調査から見えてきたことをいくつか分析し、考察します。

朝食を毎日食べている児童の割合が、全国平均を大きく下回っていること、就寝時刻・起床時刻が安定している（割合安定しているも含め）児童の割合も、全国平均を大きく下回っていることからも、規則正しく健康的な生活習慣が確立していない児童が多いという傾向が伺えます。

起きている時間帯の生活の様子を調査結果から見てみますと、学習に充てる時間の比較的短い児童の割合が若干高く、テレビゲームをしている時間が3時間、または4時間以上という児童の割合が、全国平均の2．5倍と、ゲーム機と向き合っている時間の長い児童が多いということが言えます。学校外での勉強時間はやや短い傾向で、図書室・図書館の利用が、（全くないも含め）年に数回以下という児童の割合はかなり高いという傾向があります。

一方、新聞その他のメディアからニュースを入手しているという児童の割合は高く、世の中や身の回りのことへの関心は一定あると見受けられます。また、自分にはよいところがあると思っている

平成26年9月26日

児童の割合が比較的高いことがわかりました。自己肯定感を持ちながら成長していることは喜ばしく思います。

自分を大事に思い、周りのこと・人へも関心を持ってはいますが、人の役に立つ人間になりたいと思わない（どちらかというと思わないも含む）児童の割合が高いという傾向が、顕著になっています。調査後約半年間、学校の最上級生として活躍している6年生ですので、今の意識ではまた違っているかもしれませんが、4～5年時に学校生活の中でも、高学年として周りのことも意識しながら、自分の持てる力を集団のために発揮できる場を、学校行事や異年齢集団での活動（なかよし班など）で大事にし、社会性の発達に結び付けていきたいと考えています。

小規模校で調査母体数が少ないため率数値の変動も大きく、マクロ的な分析の有効性は慎重に判断する必要があると思いますが、正答分布からは、「だいたい・ほぼできている集団」と「あまりできていない集団」とに二極化している傾向が見られます。正答率の低い児童に対する個別の学力保障策が必要で、現在も休み時間などに行っている個別勉強タイムを継続して参ります。また、授業自体も、反復学習やふり返りの機会を今まで以上に重視しながら、基礎・基本の定着を図ると共に、授業のねらいや目標が児童にとって明確になるよう共有したり、知的好奇心を喚起するような学習課題を取り入れたりするなど、工夫改善に取り組みたいと考えております。

大きな流れでいえば、学習の大切さ、勉強する意味について自覚でき、キャリア教育にもつながる目的意識を前向きにもつことができるよう指導・支援を進めていく必要も考えております。現在村立幼・小・中学校園で策定を進めています「千早赤阪村立中学校区キャリア教育全体指導計画」を基に、6年間の支援・指導の在り方を考えて参ります。

これらの分析結果により把握した課題を基に、本校では、小規模校の強みである一人ひとりに応じた指導、各学年の特性と課題に応じた指導の改善に取り組むとともに、家庭での学習に対する助言・指導に活かしていきたいと思います。基本的な生活習慣の確立と学力向上との間には相関関係があるということが、これまでの調査から明らかになっております。お子様の自立・よりよい成長を願い、学力向上に向けての家庭環境づくりと、基本的生活習慣の定着・確立に一層のご配慮をいただきますよう、お願い申し上げます。